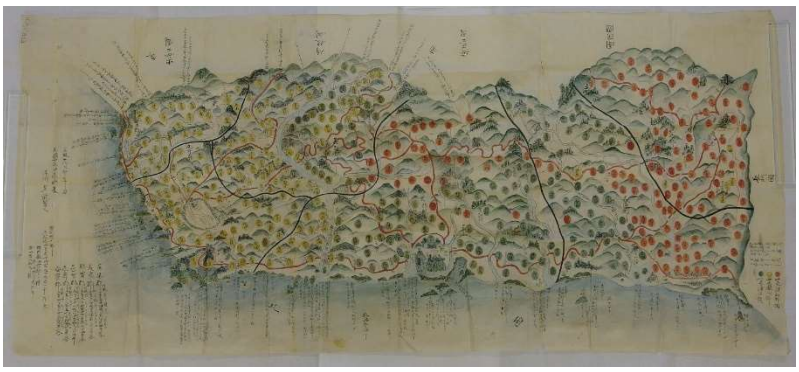
別紙

企画展「石見銀山につながる道」の主な展示資料

① 元禄石見国絵図（個人蔵）《新発見》

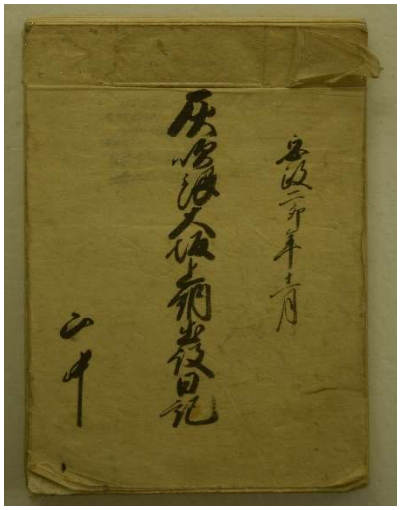


（注１）画面下が北（日本海）です。
（注２）資料保護のため７月 29 日（月）までの展示です。

元禄 12 年（1699）に描かれた石見国絵図を天保 15 年（1844）に筆写したもの。元禄の石見国絵図は県内外に複数伝わっていますが、それぞれ地形の描き方や図示する内容が異なります。令和６年に大田市内の個人宅で発見された本図は、温泉津付近で海岸線を南に屈曲して描いており、実際の地形とは異なりますが、銀山町や温泉津の様子を丁寧に描いています。また、山陰道、石見銀山街道など主な道を赤い太線で示しています。

石見銀山周辺の拡大（一部加工）

②灰吹銀大坂上納出役日記（個人蔵・大田市教育委員会寄託）



安政２年（1855）に石見銀山街道と瀬戸内海を経由して石見銀山で生産した銀を大坂まで運んだ、大森代官所の役人・山中文三郎が記した往復の道中日記。出発前の準備の様子や、輸送途中に経由した宿場で現地の役人と面談した時の配席図など、担当者でなければ知り得ない情報を細かく記録しています。銀輸送の実態を伝える貴重な古文書です。

③墨書土器・刻書土器・土馬（大田市教育委員会所蔵）

写真上：墨書土器・刻書土器
写真下：土馬（馬の形をした土製品）

大田・静間道路の建設に伴い発掘調査をした鯛渕（たいぶち）遺跡（大田市静間町）での出土品（奈良時代～平安時代）。土器には「大」「郡」「司」などの文字が確認できます。土馬は、頭と脚の大部分が失われていますが、四本の脚と尻尾の痕跡があります。これらの遺物と静間川近くという遺跡の立地を総合して考えると、河川と道の結節点を管理する公的施設が存在していたと推定されています。